【The Black Note】第8話　迷う夢の悪夢

■プレ・本編
□シーン・マリス召喚（リバープあり）
・大聖堂の奥まった儀式の間にて。神聖な雰囲気がする。
・部屋の床には一面に巨大な魔法陣が描かれている。
SE：レルシア歩く。

レルシア「親愛なる光の瞳よ……。わたしの前にココロを示せ……」

SE：呪文詠唱と同時に、そよ風。
SE：フォオオオオオ？

レルシア「光の司祭の名において、古（いにしえ）に共に歩んだはらからなる世への扉を開けたもう……。星霜の彼方より語られし、あまたの世の架け橋を閉ざしたる者に告げる。わたしは解錠を望むものなり。描かれし眼の向こうに在りしもの、……サライよ。はらからなる世に通ずる架け橋を開放し、その証を示せ。かつての同胞、翼をもちし天の使い天空に住まう異界の世。開放を望むは天使の血族……レルシア――、レルシア・ホルスト」

SE：神聖な雰囲気を示す音。
SE：光柱を表す音。

レルシア「さあ、こちら側にいらしてください……。……心配には及びません。あなたに危害を加える者は誰もいません」

SE：カツンと足音。

レルシア「あなたのお名前は……？」
マリス「……マリス。――黒炎（こくえん）のマリス」

■オープニング
セレスモノローグ「後の世に、闇の書・ブラックノートと呼ばれた書物がある。それは、12の精霊核の伝説の裏に隠された歴史を書き記した漆黒の表紙の書物だった。決して歴史の表に晒されることのなかった哀しくて、切なくて、心がおしつぶされてしまいそうなほどの真相。でも、それは飾られた偽りではなく、紛れもない真実――」

■タイトルコール
デュレ「The Black Note 第8話　迷う夢の悪夢」

■本編
□シーン・過去・迷夢とマリスと……。

レイヴン「ふむ。思っていたよりも、可愛いな。どう思う？　マリス」
マリス「そうだな。フェンリルの子どもと聞いていたから、もっと貫録があると想像していたのだが……、フツーのオオカミと言うか、子犬にしか見えない……」
シリア「オレ、犬じゃないもん」

迷夢「キミがどう言っても、可愛い子ワンコちゃんよねぇ。で、この大雪を降らせたのはやっぱり、この幼気なシリアくんなのかな？」
シリア「オレじゃない……」（ぶつぶつ、あとのゼフィのセリフと重なって
ゼフィ「シリアは体調が悪いと魔力が暴走するんです。……暴走の結果は大きな氷塊が空から轟音を立てて落ちてくるか、大雪になる場合が多いですね」
迷夢「じゃあ、今度は大雪ですんだから、かなり平和的だったってこと？」
ゼフィ「そうともいえますね」（シリアのセリフと重なります
シリア「それはどういう意味だよ？　迷夢？　……くしゃみ、するぞ」
迷夢「どうぞ。お好きなように♪」
シリア「――は……くしょんっ！」
迷夢「……。やってくれますね。シリアくんっ！」
ゼフィ「シリア！　そんな、お行儀の悪いことをしてはいけません」
シリア「お行儀、悪くない。だって、迷夢がオレのこと、いじめるんだもの」
久須那「……？　何をやっているのだ。お前たちは？」
迷夢「何をやってるって程のこともやってないんだけど、珍しいものをみんなで愛でてるだけ。だぁって、シリアくんてば可愛いんだよぉ♪」
シリア「オレ、そんなに珍しい変なもんじゃない」
迷夢「悪い意味で言ってるんじゃないよ。北リテールの精霊王さまのご子息に会えるなんて思ってなかったから、そう言う意味で“珍しい”ってことね」
シリア「何か、いいようにあしらわれてるだけのような気がするけど……」
迷夢「考えすぎだって、今度はくしゃみしないでよ」
シリア「ゼフィ。迷夢に何とか言ってやってよぉ？」
ゼフィ「コメントのしようがありません――」
シリア「そんなぁ……。オレ、何にも悪いことしてないのに……どうしてこんな目に！」

□シーン・現代に戻って、バッシュの家。
・しばらく沈黙。
SE：時計のコチコチ音、指で机を叩く音、などなど

シリア「と言うのがオレとあいつらとの出会いだったな。最悪な思い出だ」
デュレ「確かによい思い出とは言えないでしょうけど、リボンちゃんの話からしても悪意があったとは思えないですよ」
シリア「ああ、悪意はなかったろうさ。……だからこそ――」
セレス「あのさぁ？　話の腰を折って悪いんだけど……、レイヴンが居て、マリスが居るってことまではもう確認済みだけど、その迷夢とかいうのは初耳のような気がするんだけど？」
シリア「いいとこに気が付いたな」
デュレ「わたしたちはまだ会っていませんよね？」
シリア「会っていない。でも、もうすぐ、会えるような気がするよ。そして、迷夢はとにかく、計略を巡らせるのが誰よりもうまく、綿密だった」
セレス「迷夢ってそんなに頭がいいの？」
シリア「覚えてる限りでは、とかく、頭の回転が速いな。切れるって言うのかな。その瞬間、瞬間で最適の判断を迷いなく瞬時に下していく。つまり、オレたちで言うところのデュレってワケだな」
デュレ「それは言い過ぎだと思います……。確かに、知識でのサポートは出来ると思うけど、実戦となってくると……。セレスの方が……」
セレス「何だかさあ、凄い気に入らなさそう。と言うか、文句を言いたそうだね」

デュレ「当たり前です。こんなセレスに負けてるものが一つでもあるかと思うと納得できません」
セレス「……こんなんて、どんなんよ？　これでも学園を卒業してからの三年間、トレジャーハンティングをしつつ各地を巡り、腕を研いたんよ？　失礼なっ！」
デュレ「だから、その実力は認めない訳にはいかないんで。実戦経験だけはどうがんばってもセレスには敵わないんだから……。それは……頼りにしてますよ。一応――」
セレス「一応？」
デュレ「判りました。全幅の信頼を置いてます。こう言えば満足なんでしょ？　セレスはっ」
セレス「その通りなのだよ」
デュレ「けど、伝説によれば、その後、天使たちのほとんどは約百年後に完成された帰還魔法で帰途についたと。そうしたら、何故……封じられたマリスや久須那は別としてもレイヴンや迷夢は帰らなかったのですか――？」
シリア「帰れないワケがあるのだとしたら……？　……思えば、そこから始まったんだ……。……そうだろう？　――アルタ？」
バッシュ「アルタ……？」（ぐっとこらえて
アルタ「――いつから気がついていた？　シリア」
シリア「最初から、ずっとだ」
アルタ「では、何故、気付かない振りをしていた？」
シリア「オレたちに害意はないんだろ？　だったら、拒む理由もないし。お前に聞かれて困る話をしている訳でもない。としたら、追い返す理由などどこにもないだろ？」
アルタ「そう思うのか？」
シリア「ああ。それに……。お前が見ていたのは――」
アルタ「それ以上は言うなよ……」
シリア「言わないよ。アルタがそう願うなら。――ところで、最近、迷夢に会わなかったか？」
アルタ「いいや、会ってないが……、どうして、急にそんなことを？」
シリア「思い出話のついでと、……迷夢の黒い羽根を見つけたんだ……」
アルタ「迷夢がこの時代、この町にいる。なのに、どうして、お前はそんなに落ち着いていられる？　迷夢は……誰よりも危険だ」
シリア「そうかもしれないが……」（下の迷夢のセリフと重なる）
迷夢「だぁ～れが危険だって？　わたしほど、安全なやつはいないよ？」

SE：キィィイイと開くドア。

シリア「迷夢……、久しぶりだな」（ちょっと驚いて
迷夢「そうね、おおよそ、千年ぶりくらいかしら？　シリアちゃん？」
シリア「ちゃん付けで呼ぶな。せめて“くん”と呼べ」
迷夢「あたしとシリアちゃんの仲よ。減るもんでもないし、キミに対する親しみをこれでもかってくらい詰め込んでの愛情表現なんだから、そのくらい、いいじゃないの。ね？」
シリア「……その軽い口。昔から全然変わっていないんだな」
迷夢「まあね。だって、これがあたしのステータスだから。しょうがないじゃん？」
シリア「まあ、それはいいか……。それよりも、しばらく姿を見なかったが、どうして、また、近ごろ、急にどたばたと活動を始めたのか、理由を話してくれたら助かるな？」
迷夢「そんなこと、言わずと知れてるでしょ、キミのことなんだからねぇえ？　そんでさ。とりあえず、自己紹介しますっ、迷夢です。よろしくっ♪　これから、とってもお世話になると思うので、よろしくねっ♪　ふ～ん。それにしても、そうそうたる顔ぶれですね……。精霊王さま。かつての英雄の名を継ぐもの。レルシアの子孫。エルフの子猫ちゃん、その一、その二、おばさん一人。おまけ一……」

バッシュ「お、おばさん？」
レイア「おまけ？」
迷夢「あ～、他意はないから細かいことを気にしないでもらえる？」
デュレ「あなたは……何ものですか……？」
迷夢「さぁてね？　ふふ、そんなに睨まないでよ。照れるから。――はいはい、判ったから。怒らないでね。愛しのマリスちゃんがお目覚めだから、ついでに旧知の仲の人のところにも顔出そうかなって。だってさ、挨拶なしなんて失礼でしょおぉ？　ねぇ？　シリアちゃんは出世したしさ」
シリア「……そんなことを言いにわざわざ来たんじゃないだろ？」
迷夢「まぁ、そうなんだけど、陣中見舞い。と言ったら、納得してくれるのかな？」
シリア「するワケないだろ？」
迷夢「だよねぇ。あたしでも納得しないから。――じゃあ、シリアちゃんが納得できるかもしれないことを教えてあげようか？」
シリア「……。おちょくるのもそのくらいにしておけよ」
迷夢「はは、貫禄もでたねぇ。もう、抱っこなんか出来ないね？　けど、抱き枕にならなるかな」
シリア「残念だが、抱き枕は先約があるんだ。諦めてもらわなくちゃな？」
迷夢「あら、残念（急に真面目に）千年前のつづきをしに来たのよ。条件は全てそろった。あとはしっかりきっちり準備をして、アクションを起こすだけなのよね。シリアちゃん、キミは覚えてるかな？」
デュレ「迷夢さん？」
迷夢「なぁによ。ダークエルフの子猫ちゃん、え～と、その一」
デュレ「子猫ちゃんではありません。デュレです。きちんと名前を呼ばないなんて、失礼です」
迷夢「はいはい。そのデュレは異常にお堅いのね。面倒くさい。で、何？」
デュレ「面倒くさいなら、単刀直入に行きます。折角、会えたのだから、聞いてみたいとさっきから思っていました。あなたは何故、自分の世界に帰らなかったのですか……」
迷夢「今のところ、キミに話す、義理はないなぁ。けど、どしてもってなら、あっちに帰るよりこっちにいた方が楽しそうって思ったから♪　楽しければそれでいいのよ、あたし。レイヴンみたいに生真面目くんとか、マリスみたいに学者肌ってワケでもないし」
シリア「……また、お前はそんな意味もないことをしようと考えてたのか？　そのはた迷惑なところは昔から全然変わっていないな」
迷夢「ま、ね。それがわたしの取り柄だから。楽しければ、万事オーケー！
デュレ「そんなの、迷惑ですっ！」

SE：テーブルをダン！

迷夢「そお……？　……なら、ここで終わりにしよっか？」（いたずらめかして
シリア「まずい、逃げろっ！」

SE：シリアがジャンプ、セレスの頭をぎゅ！

セレス「ぎゃんっ！　踏むなっ、このケモノめっ！」

SE：きゅいん（剣が虚空から出現して）ぎら（剣の煌めく音）
SE:：シリア、迷夢に飛びかかる音。
SE:：さらにサムが剣を振って、迷夢の剣と交錯！

サム「待て」
迷夢「やるね、サム。けど、そんなんじゃ終わらないよ」

　　SE：迷夢、ハイキック、シリアくんどっかに飛んでく。

シリア「ぎゃっ」（何か、そんなような悲鳴）
迷夢「目覚めよ、光の瞳。その美しき光玉の彼方よりあまたの次元を駆け抜ける真実の道しるべを我が前に現せ！」（セリフの最後で深呼吸）
シェラ「闇の支配者・シェラの名により命ずる。微睡みの闇に住まう小さき闇の使い魔たちよ。我が命に従い、古に封じられし禁断の法力を蘇らせたまえ。天使・迷夢の魔力の波動に特化し、その魔力を反射する器を現せ！」
シリア「よせ、迷夢っ」
迷夢「開け！　クラッシュアイズ」

　　SE：光が集まるような音。そして、発射！

シェラ「ミラーフレームっ」

　　SE：空気を引き裂くような音。弾く音。
　　SE：どっか〜ん。玄関大破。

迷夢「ちっ、ダメか。流石、レルシア直系の子孫だけあるよね？　咄嗟に魔法を繰り出すなんてフツーは出来ないよ。大抵の連中はそれで終わっちゃうんだけどなぁ……」
シェラ「そうですか？」
迷夢「キミがここに生きていられる理由はそれよ。年寄りのくせに判断は早いし、動きが俊敏なのよ。そのとこは誉めてあげるね」
シェラ「嬉しくありませんよ……」
迷夢「だろうね。でも、そんなの関係ないもん。あたしはやりたいようにしかやらない」
デュレ「迷夢っ！」

　　SE：デュレ、闇護符掲げ。セレス、弓を引く。

迷夢「おっそ〜い。そんなんじゃあ、マリスやレイヴンに秒殺されちゃうよ。あの人たち、あたしよりもずっとずっと強いんだから。それにさ。あたしが来た時点で、臨戦態勢。違う？　だぁって、あたしが何ものか知らなかったんでしょ？　キミたちは」
デュレ「そうでしたけど……、その」
迷夢「まあ、いいけどさ？　マリスに負けたくないんだったら、もぉ〜っと気張らないとね？」
セレス「――キミさ。むかつく性格してるとか言われたことない？」
迷夢「ははぁ。エルフの子猫ちゃん、その二。ストレートねぇ。そう言う判りやすい性格、大好き♪　けど、思慮が浅くていけないね。もっと考えなきゃ。そ〜んじゃ、面通しもすんだことだし、帰ろうかしら。……次に会う時は敵かしら、それとも……味方なのかしらね……？」

　　SE:：足音。迷夢退場

セレス「ねぇ、あれって何なの？」

シリア「……あれが迷夢だ。掴み所がなくて、飄々としてるというか。ふわふわしてるというか。説明できない、あんなの」
サム「追わなくていいのか？」
シリア「追う必要はないよ……。少なくとも敵じゃないんだよ、迷夢は……」
デュレ「でも、どうして、迷夢さんはわざわざここに来る必要があったのですか？」
シリア「そんなの迷夢に直接、聞けば良かっただろう？　――あいつは少なからずマリスやレイヴンと絡んでるんだ。ただ、目的が違うんだよ。あいつの場合」
セレス「楽しけりゃいいって？」
シリア「違う……。迷夢にはあいつだけの目的があるんだよ……。迷夢だけの……」

□シーン・過去・マリスの部屋。
　　SE：ドアをノック、そして開く。
　　SE：足音。

迷夢「ねぇ、マリス。今、いいかな？」
マリス「……良くなくても、割り込んでくるつもりなんでしょう？」
迷夢「ほぉ〜♪　わたしの性格をよく捉えていること、マリス嬢は。こういう人はマリスくらいしかいないよね。みぃ〜んな、わたしのこと、理解不能だって言うだけど、マリスは違うの？」

　　SE:：足音
　　SE：合間を縫って、ペンを走らせるような音。

マリス「表情がコロコロ変わるだけに、かえって、判りやすいような気がする」
迷夢「そお？　あたし、こう見えても演技派なのよ？　どんな奴もあたしの演技は見破れない」
マリス「こともないと思う」
迷夢「つれないねぇ、マリスも。そんなんじゃ、レイヴンに嫌われちゃうぞ♪」
マリス「……軽口をたたきに来たのか？　――他に用事があるから来たんでしょ？」
迷夢「あ〜そうそう。スッカリ忘れてた。ねぇ、いつやるの？」
マリス「何をだ？　わたしは何もしていないぞ」
迷夢「う〜ん。それはちょっと違うなぁ？　マリスってさ、学者肌のくせして、影でこそこそするの上手いよね？」
マリス「誉めてる？　けなしてる？」
迷夢「う〜ん、どっちでも。けど、そう言うってことはやってるのね。結局」
マリス「まあ、そう言うことになるのか……」

　　SE：ペンがインク瓶に飛び込む音。リボンを付けて、差し出す音。

迷夢「あたし？」
マリス「そう、あたし。その書状を久須那に届けて。折角、来たんだから、お使いを頼むよ」
迷夢「ほぉ〜♪　ここじゃあ、あたしが先輩なのに使い走りをさせるなんていい度胸」
マリス「わたしと迷夢の仲でしょう？」
迷夢「しょうがないなぁ、もう。今回だけだからね？　マリス。で、何が書いてあるの？」
マリス「……迷夢の思った通りのこと。一応、久須那に聞いてみようと思って」
迷夢「――黙ってやっちゃえば？」

マリス「そうもいかないだろう？　スケールを大きくしたら、多少の危険も伴うし、久須那とはずっと仲良くしていたいから……」
迷夢「ま、そうだよねぇ。じゃ、任せておいて。どんな難題でも久須那を説得してみせるから！」
マリス「――迷夢でもそう簡単にはいかないと思うけどな」
迷夢「そんなのやってみなきゃ判らないじゃん？」

SE：迷夢が部屋を出て行く音。

マリス「久須那――」

SE：さらにに足音。
SE：中庭の噴水の音。

迷夢「あたしは……マリスのようにはならない……。それよりもこの世界とあたしたちの世界の崩れかけた境界を何とかしないと、手遅れになる……」

SE：ドアをノック。

迷夢「久須那、いる？　マリスちゃんからお手紙を預かってきたよ」
久須那「……迷夢か？　今、開けるから、ちょっと待て」

SE：駆け足。ドアを開ける音。

久須那「こんな時間に珍しいな、迷夢？」
迷夢「ははっ。たまにゃぁね。久須那とお茶でもしようかと思って。時間を合わせてきたんだ。――と言いたいけど、偶然かしらね。あ～。ゼフィに何だかって言う珍しいお茶っ葉をもらったから、それもついでに――、って、話をそらさないでよ」
久須那「勝手にそれていったのは迷夢だろ？」
迷夢「そうだっけ？　じゃ、話を元に戻して、マリスから手紙を預かったのね。ね、立ち話も何だから座ろう？　で、これがゼフィからもらったお茶なんだけど」

SE：手紙とお茶を差し出す音。

迷夢「でね、本題はまずこれを読んでからって、お茶はいれてくれないの？」
久須那「お茶？　ああ、お茶も用意するよ」

SE：お茶の準備。手紙を開く音。

久須那「久須那へ……。……天使たちの地位向上を目指して、か。……天使の世界との交流を深めるためにこちら側の世界との境界面を恒常的に解き放つ提案――。そのエネルギー源として……また、精霊核なんだな……」

SE：お湯の沸く音。

迷夢「ねぇ、久須那。――あっちでポットが呼んでるんだけど、お茶、まだかな」

SE：久須那歩く。再び、お茶準備。

久須那「――迷夢、お茶が入ったぞ。マリスのことは、後でマリスに直接聞いてみるとして、たまには雑談しよう……と、その前に迷夢は何を企んでいる？」
迷夢「あやや、あたしは何も企んでないよ。マリスちゃんの書状を届けに来ただけ」
久須那「誰にも見つからないようにしてるつもりだろうけど、わたしには判る……」
迷夢「な、何の話かしら？」
久須那「とぼけるな」
迷夢「ははぁ♪　さては、ゼフィか。あの娘、洞察力に優れているし、勘が鋭いもんね。ばれないようにすっごく気を使ってたんだけどな。流石は精霊王さまの右腕。そう思うと、シリアくんはまだまだヘボねぇ。全然、気が付いていないよ」
久須那「その話はまた今度でいい」
迷夢「まあ、そうだね。けど、あたし、悪さはしていないよ？」
久須那「まだ……。の間違いだろ？　……シメオンに魔力を封じ込める特殊なフィールドを形成しているそうだが、何のためだ　……マリスと同じか？」
迷夢「まずはノーコメント。けど、久須那の迷惑になるようなことはしていないつもりなんだけどなぁあ？　むしろ、久須那のためにもなるかなって、それでもダメ？」
久須那「ダメだ。わたしが『何も知りませんでした』ではすまされないだろう？」
迷夢「そりゃ、そ、だわね。けど、あたし、久須那の敵になったつもりはないんだけどなぁ？」
久須那「わたしも迷夢を敵にした覚えはない。しかし、回答によっては敵になりうる……」
迷夢「そっか。じゃ、仕方がないよね？　久須那って強いから、ずっと味方でいて欲しかったんだけど……。考え、変わらないの？」
久須那「変わらないな」
迷夢「ちぇっ、残念。けど、今に絶対に後悔するよ（クスリ）わたしはマリスとは違うんだから。でも、久須那だから、教えてあげる。あたしは……あたしたちの住む場所を守りたいだけ。その為に、この街が秘めた魔力をもらいたいの。そのためのフィールドよ、あれは」
久須那「冥界に落とすつもりか？」
迷夢「ちょっと違う。いい？　ここ数百年の度重なる天使の召喚のせいで、天使の住む世界とこっちの境界面が崩壊しかけてるの。それを直すわ」
久須那「……マリスとは逆のことを言うんだな？」
迷夢「うん♪　繋げたっていいことはないよ。今、帰還魔法の研究が盛んだから、きっと、みんな帰れる。そうしたら、修復して完全に閉じちゃうの。レルシアみたいな魔術師が生まれたら、召喚できるか判らないけど、しばらくは安泰するよ」
久須那「迷夢の考えに異論はない。けど、シメオンの魔力を以外に方法はないのか」
迷夢「じゃあ、精霊核でやってみる？」
迷夢（独り言のように「けど、ダメだと思うんだよなぁ。精霊核は思考のエネルギーの結晶体だから、純粋すぎるのね。一点集中型の魔法を使うにはいい媒体になると思うけど、広域になるとちょっとねぇ」（久須那のセリフの一部と重なる
久須那「それじゃあ、マリスと一緒になる。精霊核とシメオンを外してだな」
迷夢「まあ、それは置いといて。ただの仮説なんだから。でも、他に方法がないかと言われてもねぇ。境界面の修正をしないと、双方の世界にとって不利益なことばかりだしなぁ。う～ん……。シメオンの雑多な魔力を使うのが一番確実だと思うんだけどなぁ」
久須那「しかし――天使の召喚がなければ境界面の崩壊はとまるんじゃ……？」
迷夢「憶測でものは言えないよ、これについてはね。でね。二つの世界の境界が壊れたらどうなるかと言うと、向こうの世界がぜ～んぶ雪崩れ込んで凄いことになっちゃうの」
久須那「判らないことはないが……しかし」

迷夢「街の人は逃がせばいいじゃん、ね？　あたしが欲しいのは都市の魔力だけよ。人気がなくなっても半日くらいなら現状を維持するから、術を使うのに間に合うよ。ね、久須那。だから、あたしと組もうよ。キミが組んでくれるなら、マリスと手を切ってもいい」
久須那「……わたしに何をさせたい？」
迷夢「特になし♪」
久須那「はぁ？」
迷夢「あ〜、あれね。後ろ盾が欲しいのよ、あたし。久須那ってリテール協会のお偉いさんたちに顔が利くし、天使兵団を指一本で動かせるから。いざって時に、助かるかなって思ってね」
久須那「しかし、マリスも天使兵団の半数は持っていけるぞ……」
迷夢「それは……マリスと手を組めってこと？」
久須那「いや、迷夢の言うことが本当ならわたしは手を貸す。しかし、この街を犠牲にすることには賛成できない。そう――レルシアさまに相談してみたのか？」
迷夢「言うつもりはないよ」
久須那「何故？　レルシアさまはきっと力になってくれる」
迷夢「うん。レルシアはそうだろうね。だから、巻き込めない。あの人を関わらせたらダメ。そうじゃないと、死んでしまうから。……何か、そんな気がするんだよね。わたし、レルシアみたいな人、好きなんだ。だから、ずっと生きてて欲しい。こんなコトに命をかける必要なんかないよ。うん？　ど、したの、変な顔して」
久須那「迷夢の口からそんな発言が聞けるとは思ってなくてね」
迷夢「ホントよ、ホント。レルシアのことは本気だから。心配しなくていいからね」
久須那「心配するとかしないとか、そう言うことじゃなくて……」
迷夢「大丈夫よ。味方は一人でも多い方がいいし、少数派よりも多数派の方が良かったんだけど。最後まで実行できるように計画は立ててあるんだから。邪魔が入らなければ、の条件付きだけどね。まあ、そこら辺はどうでもいいんだ。でもね、久須那」

SE：肩を叩く音。足音。

迷夢「証拠は見せてあげられないけど、いずれキミはあたしが正しいことに気付く……」

□過去。いつもの喫茶店。
SE：時計塔の鐘が五回ほど鳴る。
SE：カラランランとドアの開く音。

ゼフィ「……こんにちは」
女主人「いらっしゃいませ。……あら？　今日はおちびちゃんは一緒じゃないんですか？」
ゼフィ「おちびちゃんはお寝坊さんの真っ最中よ」
女主人「精霊でもお寝坊するんですね」
ゼフィ「昨日、迷夢と散々遊んだから、疲れたんだと思うけど……次期、精霊王と言う方が、こんな有様では示しが付かなくて、困るのですが。今日はおまけしておきました」
女主人「おまけって……、おちびちゃんは至福の時を過ごしているってことですか」
ゼフィ「その通り！　……ところで……」
女主人「何ですか？（察して）……なるほど、壊れ物は奥にしまってたほうがいいかしら」
ゼフィ「ありがとう。他に迷惑をかけていい場所を知らないから……」
女主人「かけてもらったら困るんですが、ゼフィのお願いだったら、断れませんよ。……で、そ

のお相手は誰なんですか？」
ゼフィ「……迷夢……か、マリスです。そろそろ、来るころだと思いますよ」

SE：足音、カラランランとドアが開く。

女主人「いらっしゃいませ。……迷夢さん」
迷夢「ねぇ、ゼフィ。わたしのことをあれこれと詮索するのはやめてくれないかしら？　久須那にはばれちゃうし、フィールドは上手くできないし、いいことなしなのよね、実際」
ゼフィ「やはり、迷夢だったんですね」
迷夢「みんなには気付かれないようにしてきたつもりだったけど、ゼフィには通じないのね？」
ゼフィ「いいえ、今の今まで確証はありませんでした。マリスとあなたのどちらかと言うところまでは突き止めたのですが……」
迷夢「ほぉ〜♪　そこまで判れば上出来じゃん。けど、マリスが何もしていないと思ったら大間違いよ。あの人だって自分のしたいことをしてる。まあ、あれよね？　したいことは違うけど、思いは一緒っての？　――あたしの気持ちを思うなら止めないで欲しいなぁ、ゼフィ？　精霊のあなたなら、あたしの気持ち、少しは判るんじゃなくて？」
ゼフィ「人に追われる精霊たちの末路……。しかし、それとあなたがやろうとしてることは関係ありませんよ？」
迷夢「そおかしら？　あたしの計算によると作戦決行の時にちょっと手を加えてやれば、精霊の世界も人と関わりを持たなく出来るの。精霊狩りなんて悲劇には遭いたくないでしょ？」
ゼフィ「あいたくはないですね。しかし、精霊王さまは精霊のことばかりを考えていてはいけないと言います。狭すぎる視野は判断を誤らせます。ですから、幅広く様々なことを考慮に入れて物事を判断なさいと……」
迷夢「ふ〜ん。一理あるとは思うな。けど、これは誰の犠牲もなしに成立しうるのよ。あたしはマリスとは違う。そこんところ、忘れないでもらえるかしら？」
ゼフィ「忘れていませんよ。そうでなかったら、シリアと遊ばせたりなんかしませんよ」
迷夢「ほぉ〜♪　流石ね、ゼフィ。人を見る目があるわぁ」
ゼフィ「それほどでも……」
迷夢「で、キミはどうしてあたしの目的を探るのかしら？　ゼフィ」
ゼフィ「は？」
迷夢「あ〜、もう、まどろっこしいなぁ。あたしがシメオンを冥界に落とすのだとして、マリスが天使の世界との扉を開け放つのだとして、キミはどうしたいの？　だって、ゼフィや精霊王さまには直接関係ないじゃん。利害の一致も不一致も何もなし。かすりもしなけりゃ、すれ違ったりもしない」
ゼフィ「そうですね、……あえて、言うなら、全ての生あるものたちのために――」
迷夢「ちぇっ。ゼフィはいつも格好良すぎなんだよね。ま、気取ってなくて、そゆことをフツーに言えちゃうゼフィが好きなんだけど」
ゼフィ「ありがとう」
迷夢「けどさ。判ってるんでしょう？　マリスも自分の思いに忠実なだけだったこと。――一世一代の賭に出るのに他人の意見なんて無用なのよ。あたしにとってそれが正しいか否か、それしか問題にならない」
ゼフィ「悪意はないと」
迷夢「ある訳ないじゃん。だからさぁあ？　久須那にも言ったけど、あたしは誰かに犠牲になって欲しいのでもなんでもないのよ。この街の魔力さえだけもらえたら、それで十分。あたしはマリスとは違うのよ？　だから、久須那とゼフィがいてくれたら、色々と楽になると思うんだよね？　ねぇ、手伝ってよ？」

ゼフィ「手伝えたら良かったんだけどね……」
迷夢「……そっか、ゼフィはそう言うと思ってた。けど、残念だな。久須那もゼフィも仲間になってくれない。まあ、久須那は立場上、ああ言うしかないよねぇ」
ゼフィ「……？」
迷夢「仲間にはならなかったけど、やらせてくれるって事よ。判らないかなぁ。この場合、マリスは絶対的な悪なのよ。久須那は天使兵団の半数を引っ張ってマリスと戦うの。ああ、兵団の半分はマリスの言いなりだから」
ゼフィ「つまり、協会の注目をそっちに集めてしまうと……」
迷夢「ふふぅ、ご明察♪　あたしへのマークが手薄になるわ。どっちにしても、協会は敵になっちゃうから……この方が良かったのかなぁって。少し淋しいけど。ね、だから、ゼフィ、手伝ってよ」
ゼフィ「いいえ」
迷夢「はぁ〜ん、決意は固いのね。壊れちゃったら、全ての生あるもののためも何もなくなっちゃうんだけど……。時間はちょっとだけ残ってるから考えてみてね。――！　あ、あと、今日の約束忘れないでよ。あたし、先に行って待ってるから、このままどっかに遊びに行っちゃうってのはなしよ、ゼフィ。あ、それから、もちろん、シリアくんも一緒。最後はみんな一緒なんだから、すっぽかしたら、ダメだよ、絶対に……」

□過去・ゼフィの家の前。
　SE：足音。

迷夢「すっぽかさないでっていったのになぁ……」
シリア「……。ねぇ、ゼフィ。迷夢がうちの前で何かやってるよ」
ゼフィ「そうですね」
迷夢「あっ！　ゼフィ、シリアくん、こっちこっち。早く、家に入って」
シリア「自分ちなんだけど、一応、ここって」

　SE：家に入るような何か。

ゼフィ「大きなキャンバスですね」
シリア「うわぁ……大きいねぇ……」
迷夢「久須那、マリス。ねぇ、ゼフィが帰ってきたから、そろそろ始めようよ。テーブルのところの椅子もってレイヴンとは反対側の壁際に行って」

　SE：椅子をガタガタ

久須那・マリス「オーケー」
迷夢「ありがと。でぇ、どうしようかな」
マリス「……わたしは後ろでいいぞ。レイヴン。お前も後ろにしておけ。だから、迷夢、久須那、ゼフィで並んだらいい。シリアくんは誰かの膝の上に乗せてもらえ」
迷夢「そうしようか。うん、そうする♪　じゃ、シリアくんはこっちね」
シリア「……迷夢の膝の上に乗るってこと？」
迷夢「ね、いいでしょ、ゼフィ」
ゼフィ「わたしはいいけど」
シリア「うん……。ねぇ、振り回さないでしょ？　いっつもそう言うのに全然聞いてくれないんだもの」

迷夢「今日は大丈夫だよ。もう、そんなことしないから。……最後、だからね……」
シリア「最後？」
迷夢「ううん、何でもないよ」
シリア「おかしな迷夢。いっつもおかしいけど、今日はもっと変っ」
迷夢「何ですって、シリア！」

　SE：ゲンコツでぐりぐり。

シリア「痛いっ。痛いってば、迷夢！　もぉ、だから、迷夢の近くはイヤなんだよぉ」
レイヴン「なあ、みんなの場所はそこでいいのかい？　よかったら始めるぜ？　……もう、始めてるけどさ。とりあえず、デッサンが終わるまで大人しくしていろよ。特に迷夢っ！」
迷夢「どうして、わたしだけなのよ」
レイヴン「それは……十分もしたら判るだろ？」

　SE：時計がコチコチ。
　SE：サラサラ、筆を走らせる音。

マリス「……そろそろ、時間になるが、どうなると思う？」
久須那「恐らく、無理だろうな……」
迷夢「……ねぇ、レイヴン、まだぁ？」
レイヴン「一朝一夕には描けないよ。デッサンが終わるまで大人しくしてろって言っただろ」
迷夢「え〜っ。じっとしてるのって一番苦手なんだよねぇ」
レイヴン「そもそも、迷夢が言い出しっぺだろ？　我慢、我慢」
迷夢「もっと、こう、ちゃちゃっと終わるやつないのぉ？」
レイヴン「ないのっ！」
迷夢「そお？　……。もしかして、抽象画を描いてるとか言わないでしょうね？　これだけみんなを待たせてるんだから、写実的にお願いよ？　抽象画なんて意味ないんだから」
レイヴン「……何を言ってるんだ？　……少しくらい動いてもいいから、黙っててくれ。気が散る」
迷夢「う〜ん。それはちょっと無理」
レイヴン「何でっ！」
迷夢「だってさぁ、わたしってきっと口から先に喋りながら生まれてきたのよ。何て言うか、お喋りがステータスだから」
レイヴン「じゃあ、せめて、矛先を他に向けてくれ」
迷夢「う〜ん、今はレイヴンが旬なのよねぇ、あたし的に」
レイヴン「……もうどうにでも好きにしろ……」
迷夢「ははぁ〜ん♪　ありがと、レイヴン。じゃ、そゆことで」

//時間の経過、
　・みんな、寝静まって夜になる。
　SE：レイヴンが絵を描いている音。シリアが近づく足音。

シリア「レイヴン、まだ、起きてるの？」
レイヴン「シリア？」
シリア「だって、後は色を塗っていくだけなんでしょう？　慌てなくたって……」
レイヴン「時間はないんだよ。……シリアには判らないかな」

シリア「どういう事？」
レイヴン「大人の事情ってやつさ」
シリア「大人の事情？　何か都合が悪くなったら、すぐそれだ。大人ってずるいよ」
レイヴン「けど、シリア。すぐに判るよ。もし、これが夢ならずっと醒めない方がいい。もし醒めるにしても……少しでも長い間、夢を見ていたいだろう？」
シリア「今日のみんな、変だよ？　最後だとか、夢だとかって」
レイヴン「まあ、そう映るかもしれないな。さあ、もうお休みよ。明日の朝、キミが起きたら出来ているはずだから、楽しみにしててご覧よ」
シリア「うん、もう、寝るぅ。また、お寝坊したらゼフィに締めあげられそうだし。お休み、レイヴン」
レイヴン「お休み、シリア……。――君とはずっと友達でいたかったよ……」

SE：足音。

□現代に戻って、バッシュの家。
SE：やはり、時計がコチコチ、時間の経過。

セレス「何か、あれだよね。リボンちゃんの話を聞いてるとしんみりしちゃってさ。やるせないって言うか、淋しいって言うか。これからどっかに一戦ぶちかましに行こうか！　って気分じゃないよね。士気、下がりまくりだわさ。迷夢にしても、マリスにしても何だかんだ言いつつ、友達思いのいいやつじゃない？　それがどうして、敵になっちゃうワケさ？」
シリア「どうして、だろうな。しかし、まあ、慌てるな。残りの伝説はこれからが本番だ」
デュレ「それはリボンちゃんの話を聞いたら、理由がわかるととらえてもいいんですね？」
シリア「それもどうだろうな。……ただ、今は最後まで聞いていろ。ふふ、しかし、思い出すなぁ。こうしてみんなで集まっていると、まるであの日のようだよ。よく覚えているんだ。この辺だったかなぁ。オレは迷夢の膝の上にいて、ゼフィはその左隣だったかなぁ。とすると、久須那は迷夢の右隣で、マリスはその左斜め後ろ、レイヴンは～確かマリスの隣に自分の姿を描いていたな」
セレス「その絵はどこにあるの？　大きなキャンバスに描いたなら、残っててもいいよね？」
シリア「……残ってるよ。見たことがあるはずだ。お前たちもついこの間見てきたばかり……」
セレス「え？　ううん。見てないから。だって、ゼフィ、迷夢、リボンちゃんでしょ。マリスに、レイヴン。久須那。……久須那？　少なくともあたしらが通ってきた道筋にはないんでない？」
デュレ「……そのキャンバスの大きさは人の背丈よりも大きいんですよね？」
シリア「そうだよ」
デュレ「だったら、一つだけ心当たりがあります。……例えば、それが油絵なら、その上に何度でも塗り重ねて絵を書きかえることが出来る。もっとも、それでもオリジナルの余韻が残るはずなんですが……。真っ新なキャンバスに描くのとやっぱり一度描いたものの上とは違うみたいですし」
セレス「なぁに？　デュレは久須那の封印の絵がそれだって言いたいの？」
デュレ「う～ん。その後の混乱で消失してしまったとも考えられるけど、一番、ありそうかなって」
セレス「だって、千五百年も無事に存在してるキャンバスなんてあるはずないもん。あれはリボンちゃんとシェイラルさんの魔力がかかってるからあんなに保存状態がいいんでしょ？　って、あれ？　魔力が保護する？」。
デュレ「元の絵の上に魔力で他の絵が描かれてるなら、下の絵は綺麗に保存されると思いました。

戦何百年も経って、それでも残ってるとリボンちゃんが言うのなら、それくらいしかないでしょう？」
セレス「うなぁ……」
シリア「デュレの言うとおり、封印の絵がそれなんだよ……。表に見えてる久須那の絵はオレとシェイラルの魔力で描かれた、いわば紛い物なのさ」
セレス「けど、本物みたいに見えたよ？」
シリア「それが魔法だろ？　何かを封じたことを簡単に見破られたら困る」
デュレ「じゃあ、いいですか？　久須那の封印を解いたら、元の絵が見えるようになるんですか？」
シリア「ああ、そうだよ」
セレス「もう一ついいかな？。じゃあ、聞きます♪　リボンちゃんはその“絵”のような関係を取り戻したいんですか。それともどうでもいいんですか？」
シリア「……どっちでもいいよ」
デュレ「――わたしにはそうは思えません」
セレス「だよね？　デュレ。ホントにそう思ってたら、こんな話をする訳ないもん」
デュレ「……決めました。リボンちゃんの話を全部聞いたら、気が変わるかもしれません。でも、わたしは……、わたしたちが取るべき道筋は……」

・以降の、セレスとデュレのセリフは重なる

デュレ「あなたの友達を取り戻すこと」
セレス「キミの友達を取り戻すこと」